

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成23年 9月21日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 博士課程1年

氏 名 Catt Adam Alvah

助成の種類	平成23年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	印欧語研究学会会議 (Arbeitstagung der Indogermanischen Gesellschaft)		
発表題目	A “Lost” i-stem: Pali pitthi- ‘back’		
開催場所	ドイツ・Erlangen・Friedrich-Alexander大学		
渡航期間	平成23年9月12日 ～ 平成23年9月19日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円	
	使用した助成金額	200,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	航空賃	143,620円
		宿泊代	35,150円
		電車代	18,272円
学会費		3,420円	

国際研究集会発表助成 成果概要

京都大学文学研究科言語学研究室

Catt Adam Alvah (キャット・ アダム・ アルバー)

【本会議の概要】

The Society for Indo-European Studies(ドイツ語名Indogermanische Gesellschaft)は、古代インド・ヨーロッパ諸語の歴史言語学的研究を中心とする学会の中でも特に伝統と権威のある学会である。その学会が毎年開いている会議 (Arbeitstagung der Indogermanischen Gesellschaft) の目的は、古代インド・ヨーロッパ諸語を比較言語学的な手法によって、同系統に属する諸言語の共通の祖先である祖語 (印欧祖語といわれる) を再建し、個々の言語が祖語の段階からどのような変化を受けて成立したのかを明らかにすることである。

今年の会議のテーマは印欧祖語における名詞の研究であって、名詞の形態、名詞と形容詞の関係、集合名詞や名詞派生などに関する研究発表が行われた。印欧祖語の名詞類は非常に複雑な体系を持ち、近年の研究によってその体系は次第に明らかにされつつあるが、多くの不明な点がまだ残されている。三日間にわたって、ヒッタイト語、古代ギリシア語、ラテン語、バルト・スラブ諸語、ケルト語、ゲルマン諸語、トカラ語や古代インド・イラン諸語など、様々な古代言語の観点からの研究発表が行われた。参加者は主にヨーロッパ諸国とアメリカの歴史言語学の専門家で、大変有意義な議論が展開された。また、每晚懇親会が開かれ、欧米の著名な学者と交流し、友好関係を深めることができた。

【発表内容】

上で書いたように、本会議のテーマは印欧祖語における名詞の研究であって、私は、古代イラン語と中期インド・アーリヤ語に属するパーリ語の言語資料に現れる「背中」を意味する名詞について発表を行った。パーリ語には pitthi- と pittha- という語があり、両方には「背中」という意味があるが、前者は i- という母音で終わり、後者は a- という母音で終わっている。また、古代イラン語にもパーリ語と同様なパターンがある。同じ「背中」を意味するのに、この名詞が i- もしくは a- で終わる理由はいままで明らかになかった。

そこで、私は名詞が i- もしくは a- で終わる現象を印欧祖語における名詞派生パターンの一つと関係づけた。印欧祖語では、o- という母音で終わる語 (インド・イラン語派では、これは a- という母音で現れる) はよく形容詞として機能し、それに対して i- で終わる語は抽象名詞を形成する。この派生関係は印欧祖語の段階で生産的だったが、何百年も経つにつれて、この派生プロセスは多くの語派で次第に消えてしまったと考えられている。通常、

印欧祖語の母音 o- もしくは i- にさかのぼる語のどれか一つがある言語に保持されている。それにも関わらず、パーリ語とイラン諸語では、「背中」を意味する語は印欧祖語の o- と i- でおわる語を両方保持している。その保持された理由として、パーリ語とイラン語において、それぞれの母音でおわる語は違った機能的あるいは意味的な役割を担うようになって、その役割分担によって両方の母音でおわる語が保持されたことを示した。

【謝辞】

本研究発表を行うにあたり、研究助成を下さいました京都大学教育研究振興財団殿に厚くお礼申し上げます。大変有意義な会議となりましたことをここにご報告し、今後とも研究に益々邁進して参ります。今後ともよろしくお願い申し上げます。